

天使

PER CARITATEM
AD VERITATEM

vol.38 March 2025

T E N S H I C O L L E G E

専門職への誓い



たくさんの感謝と目標の再確認

栄養学科2年 松澤 千裕

私は、10月に行われた「ステップアップセレモニー」を通して、天使大学に入学した意味を再確認できたと共に、自分自身を見つめ直すことができました。1年生の時に比べ、2年生では勉強の難易度が上がり、学修に対するモチベーションが下がっていました。そんな中でステップアップ・セレモニーに参加し、私は大好きな「食」を通して、人々の健康を守りたいという夢を忘れかけていたことに気がきました。そして、勉強に対する姿勢を変えなければならないと強く感じられました。それに気づかされた1番のきっかけは、母親が来ていたことです。式が進むにつれ、今まで女手1つで育ててくれた親への感謝の気持ち、またこれから社会に出て働いて親孝行しようという思いが込み上げてきました。さらに、この約1年半、共に学び、助け合ってきた仲間たちと参加したことによって、同じ目標を持つ仲間として一緒に頑張っていきたいという気持ちと、置いていかれないようにという焦りも生まれました。

ステップアップ・セレモニーを通して得られた、支えてくれている方々への感謝の気持ちと、管理栄養士としての目標を忘れずに、残りの学生生活を有意義な時間にしていきたいです。



看護職を目指す自分と向き合う

看護学科2年 工藤 暖々

11月22日に行われた戴帽式に参加し、戴帽の儀や誓いの言葉、キャンドルサービスなどが行われました。式の準備に携わって下さった方々、式に足を運び、見守って下さった方々に感謝します。

戴帽式は、ナースキャップをいただくための式というイメージが強く、行事の意味について知りませんでした。式の準備が始まり、戴帽式には、看護職を目指すことに対して改めて深く考え、決意を新たにするという意味があること、伝統がある大切な行事であることを知りました。準備を重ねていくうちに式の意味や重みを実感していききました。戴帽式を通して、今までの自分を振り返り、看護職になるという自覚を改めて持ち、日々の学習や実習により励んでいきたいと思いました。上級生祝辞の中で、患者さんの人生背景や歴史を知り、リハビリの意欲を引き出せるような関わりを持ったという実習体験が印象的でした。施設実習で高齢者の方の生活を理解するためには、生きてきた歴史を知ることが大切だと学びましたが、人生背景や歴史を、実際にリハビリの意欲を高める援助に繋げることができると気づきました。これからも、周りの人への感謝の気持ちを大切にし、目指す看護職像に近づくために主体的に学びを深めていきたいです。



学びの振り返り

1年を振り返って ～時の早さを感じる日々～



栄養学科1年 高橋 海音

入学から約1年が経ち、二度目の定期テストが始まるようとしています。知識がほぼゼロの状態から始まった専門科目の授業に、多くの授業で触れる国家試験の過去問題などどのように学習を進めればよいのか初めはわかりませんでした。しかし、定期テストに向けても国家試験に向けても各教科の先生方が丁寧にプリント解説をしてくださるので少し不安な中も学習していくことが出来ました。また、1人で勉強していると詰まる事もありましたがマリアホールや図書室など常に大学内全体で勉強している人がいるので自分自身も頑張ろうと思うことが出来ました。

勉学とは別にボランティア活動や学校行事を通して、違う学科の人たちや先輩方とも少し関わる機会がありました。加えて、オープンキャンパスのみならず学校外での様々なイベントのお手伝いが募集され、自分の興味のあることに積極的に参加しやすくなっているため個人でボランティアをするより、多くの経験が出来ているのではないかと感じています。

個人的に、中学や高校などとは比にならないほど今までより1年という時

間の経過を早く感じています。入学から授業に慣れてきたと思えば後期になり授業が変わり、また新鮮な気持ちで学校生活を送るようになり、テスト期間が近づき2年生になろうとしています。もう1年が経とうとしている実感はありませんが、このままだと国家試験や卒業まで自分が考えているよりも早く迎えることになりそうです。そのため、今まで以上に自分の興味のある事には積極的に参加し、学生にしかできない事など学生の特権である多くの時間を使い、自分自身のための経験を積めるように過ごしていきたいです。



調理学実習

1年間の成長と学び ～友人と支え合い過ごした日々～



看護学科1年 高橋 明日香

天使大学に入学してまもなく1年となりました。

この1年間、講義に課題に勉強にアルバイトと忙しい毎日を送っていたなかで、時間の使い方の大切さを身に染みて感じました。身につけなければならない知識や技術は膨大にあるのに、終わらない課題と足りない時間に絶望することが何度もありました。いまだに時間の使い方には試行錯誤していますが、優先順位を考えると、1つの課題をだらだらやらないこ

と、自分のキャパシティを考えてスケジュールを立てることを意識することで、限られた時間の中でやるべきことができるようになりました。また、講義中のグループワークや友人とのテスト勉強、技術テストの練習

を通して、友人と教え合い励まし合いながら、多くの刺激をもらった1年であったと感じています。

2年次からはより深く看護を学んでいきます。一日一日を大切に、周りの人達への感謝を忘れずに過ごしていきたいです。



基礎看護学実習



天使祭を実施して ～天使祭実行委員長としての成長と学び～

天使祭実行委員長 看護学科2年 石割 恵斗



天使祭準備期間から当日までは、多くの課題と向き合い、そして成長を実感する貴重な時間でした。特に大変だったのは準備期間での外部の業者や出店者との連絡です。私は最初、役所やキッチンカー、ボランティア団体といった外部の業者、各団体との調整を複数引き受けてしまっており、出店者ごとに連絡手段が異なることで電話やメール、直接の打ち合わせなど、様々なやり取りを行っていました。また、同時並行で大学の授業や課題に追われる中で、どうしても情報が

行き違ったり、連絡が遅れたりすることがあり、計画通りに進めることが難しい場面もありました。そして、開催日が近づくにつれて、出店者のキャンセルにより

会場内の業者や学生の配置変更が必要になる事態も発生していました。その際に、この状況を知った役員から、1人で抱え込まずに協力をお願いするべきだということを伝えられ、五役を中心とした輩の会役員に相談、協力してもらうことで何とか乗り越えることができました。このことから、日々の報告・連絡・相談の重要性とチームワークの重要性を強く実感しました。

そして、天使祭が無事に開催され、地域の方々が楽しそうに参加している姿を見ることができた瞬間達成感が込み上がってきました。地域とのつながりを深め、天使祭が地域の方々にとっても大切なイベントであることを実感し、全ての準備が実を結び、多くの方々に喜んでもらえたことが、私にとって大きな励みとなりました。



体育祭を実施して ～やりがいと不安が交差するなかで～

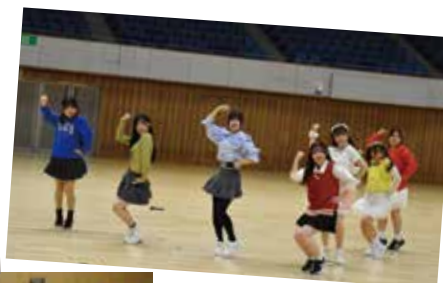
体育祭実行委員長 看護学科2年 川口 真生



私は、より多くの人に参加してもらい、楽しんでもらえるような体育祭にできるように企画・運営を行ってきました。少しずつ体育祭の形が見えてくるにつれてやりがいを感じながらも、輩役員への仕事の割り振りができなかったり、思うように準備が進まなかったりして焦りが募ることもありましたが、不安と緊張を抱きながら体育祭当日の開会式を迎えると、自分が想像していたよりも多くのみなさんが参加してくださっていました。体育祭中も、チームの勝利を目指して競技に夢中になったり、友人と笑い合ったりしている様子を見ることができ、体育祭を無事に開催できたことに、嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいになりました。実行委員長は自分ではない方が良かったかもしれないと自信を無くすこともありましたが、これまで頑張ってきて良かったと思うことができました。体育祭という行

事が、みなさんにとって大学生活の思い出の一つとなっていたら、嬉しく思います。

一方で、体育祭当日は常にバタバタしてしまい、なかなかタイムスケジュール通りに進行できなかったり、役員の中でルールが曖昧になってしまったりしていた部分もありました。次年度以降は、今回の反省点を改善し、よりよい体育祭をつくってほしいと思います。体育祭の運営に関して、みなさんにご迷惑をおかけしてしまったこともあると思いますが、体育祭へのご参加、ご協力いただき本当にありがとうございました。



学びの振り返り（大学院）

大学院で保健師を学ぶことの魅力 ～実習と研究の経験から～



大学院 保健師コース 2年 水澤 胡桃

大学院での生活は、大変なこともありましたが、それ以上に自分を成長させ、保健師の魅力を再認識することができました。大学院では自分自身で考え、発信し、行動しなければならないことが多くありました。特に研究では、複数の施設に協力依頼をしたため、スケジュール管理はもちろんですが、どうすれば自分の研究の意義が伝わるか、興味を持ってもらえるかを考え取り組んでいました。自分の考えを持ち、見通しを持ちながら行動する力を身につけることができたと思います。

実習では、家庭訪問や健診、健康教室、地域ケア会議など多くの保健師活動を経験しました。外国人への

支援にも携わらせていただき、保健師活動の幅広さや必要性を強く実感しました。また地域特有の健康課題について、多職種の方とともに考えたことは、自分がどこでどのような保健師活動をしたいかを考えるきっかけになりました。2年間という時間をかけて保健師の学習に向き合えたことは、私にとって大きな意義があったと思います。どんな時でも院生のことを一番に思い、サポートして下さった先生方や、最後まで一緒に走り切ってくれた仲間には感謝の気持ちでいっぱいです。修了後は市町村の保健師として働きます。誰一人取りこぼすことなく、住民の方々の拠り所になれる保健師を目指したいです。

助産師への道 ～成長と学びに満ちた実践の1年～



助産研究科2年 寺田 莉歩

2年生になってからの1年は、春の両親学級の企画・実施や就職活動、夏の独立助産院実習、秋には統合実習Ⅱ、特別統合課題研究、選択科目の性教育実習があり、同時並行で様々な課題に取り組まなければならず、あっという間で大変な日々を過ごしました。1年を通して、本当に大変な日々でしたが、日が経つごとに、自身の成長を感じることもでき、やりがいのある一年にすることができたと思います。特に性教育実習は、学びが多く、大学院生のうちに経験することができてよかったと思えたものでした。性教育実習では、高校の生徒さんや先生の意見を聞きながら、一か

ら性教育の授業を企画します。その中で、学校との連携の仕方や、計画から実施までの流れ、対象の年齢や興味に応じて内容を工夫することの重要性や難しさを実際に体験し、学びました。実施した授業も、まだ改善の余地がある内容でしたが、試行錯誤し、授業を作り上げることができた経験は、今後の助産師活動に充分いきてくると強く実感でき、春から助産師として活動する自分の自信になりました。実習に協力していただいた母子とご家族、助産師さん、高校生の皆様、先生方との関わりを忘れず、修了後は、謙虚で温かい姿勢で対象者さんと接し、確かな技術を提供できる助産師となれるよう、励んでいきたいと思っています。

大学院での学び ～学びと実践を通して～



ホスピス緩和ケア看護学コース1年 小泉 智子

早いもので天使大学大学院に入学してからもうすぐで1年がたとうとしています。私は、臨床でがん患者さんと関わる中で、自身の看護を振り返りもつとできることはなかったのだろうか、患者そして自分自身が後悔しないためにはどうしたらよいのかと考えた。結果、大学院への進学を決めました。進学後は久しぶりの座学での講義や初めてのプレゼンテーション、たくさんの課題に追われ日々圧倒されつつも、他領域の仲間と支え合いながら毎日楽しく学ぶことができています。

また、現在働きながら大学院で学んでいるため、学

んだことをすぐに臨床の場で実践していくことができ、患者や周囲のスタッフの反応から自分自身の成長を感じる一方で、新たな課題を見つけることにもつながり、その都度自分自身の課題と向き合いながら学習を進めています。大学院への進学はこのような自身の課題と向き合うための良いきっかけであったとも感じています。今後実習を通してこれまでの学びを確実に実践に活かしていけるよう、そして自分自身の課題を乗り越えていけるようこれからも精進していこうと思っています。

英国への国際助産学実習を企画・引率して

助産研究科講師 椿 麻衣子

2024年10月12日から13日間、大学院助産研究科の2年生3名を引率し、国際助産学実習で、私が助産師として勤務していた英国ロンドンを行先に行きました。ロンドン大学シティ校助産学部へ5日間の短期留学し、英国の助産学生と共に、講義の聴講や、グループワークと学内演習への参加、病院にて実習中の助産学生のカンファレンスの見学を通して、高い実践力を持つ英国助産師がどのような教育を受けているかを体験し、日本の助産教育を振り返る機会となりました。また、「日本の周産期ケアと助産教育」についての英語でのプレゼンテーションを行い（写真1）、質疑応答では、男子助産学生から自分は日本で助産師になれるのかという質問を受け（写真2）、日本では助産師は女性だけという当たり前のことが、男性助産師が存在する英国では疑問となり、制度や教育、文化の違いを改めて考えさせられました。大学以外では、病院の視察をし、院内助産やグリーンフケア、スペシャリストミッドワيف（専門助産師）等についての話を聞き、OSCE コースでは外国人助産師と共に実践を学び（写真5）、Nursing and Midwifery Council（英国看護助産評議会）でのヒアリング（査問）を傍聴して、助産師の専門性や自律性、高い実践力の必要性、助産資格の責任の重さについても学び、日本の助産師に必要なものについて深く考える機会となりました。



（写真1）英国助産学生への本学生の英語によるプレゼンテーション「日本の周産期ケアと助産教育」



（写真2）ロンドン大学シティ校のLecturerミランダと助産学生（男女）と、プレゼンテーションについて意見交換



（写真3）Direct entryの助産学生1年生たちの基礎看護技術の学内演習に、サポートしながら一緒に血圧測定



（写真4）ロンドン大学シティ校のCertificate（修了証書）を取得した本学生の笑顔



（写真5）英国での助産師免許取得を目指す外国人助産師たちと一緒に、OSCE（Objective Structured Clinical Examination）コースに参加し、MEWOSチャートの活用について学んでいます

MEWOS (modified early obstetric warning system) チャート



（写真6）セントメアリーズ病院にて陽気なBand7 Labour Ward シニア助産師とBand6 分娩担当とトリアージ担当の助産師たちと（※ Bandは臨床実践能力の区分）



（写真7）OSCE 研修からロンドン大学シティ校へ移動中に、英国のシンボルの一つビッグベンと国会議事堂と一緒に撮影

また、英国で活躍する日本人助産師との討論会や、私の元同僚である英国助産師やアシスタント達との交流会を通して臨床での実践やチームワークについて学び（写真6）、ナイチンゲール博物館やRoyal College of Midwives（英国助産協会）などへの視察を通して看護・助産の歴史を学びました。

渡英前に短期留学の調整が進まず、大学に到着した日の朝に5日間のスケジュールが渡され、他の予定を慌てて調整しなくてはならず大変でしたが、人種や文化の違いがある国際色豊かな助産学生や助産師たちにカルチャーショックを受けながら学んだことを活かして、グローバルな視点で日本の助産教育や周産期ケアを考え、世界に羽ばたいて行ってくれるのを願っています。

一執筆者紹介一



＜アフリカ出身の同僚と＞

渡英から助産学生経験 / 助産実践を活かしたグローバルな助産教育の大切さ

助産研究科講師 椿 麻衣子

三河国の看護師が、金沢大学で助産学を学んだけれども、地元に戻って就職し、2002年に助産師の評価が高いイギリスで助産師になるという夢を持ち、渡英しました。大学入学 / 英国看護師資格取得のために必要なIELTSのスコアを取得するために語学学校で英語を勉強、サンダーランド大学では、外国人看護師と一緒に学びながら英国看護師資格を取得し、ロンドン・シティ大学にて英国助産師資格を取得後、人種のるつぼといわれるロンドンの国営病院でイギリス人だけでなく、色々な国から来た同僚た

ちと仕事しながら、助産師として13年間勤務し、幅広く経験を積みました。在英中に、助産学と翻訳通訳学の2つの学位（修士）も取得し、在英日本人妊産婦のサポートや、ロンドンに来る日本人助産学生のためのスタディツアーの企画もしていました。また、マッサージやアロマセラピーも学び、それらを活かした助産ケアも勤務病院で提供してきました。

今年4月より、日本で唯一の「助産師養成のための専門職大学院」である天使大学大学院にて、イギリスでの助産学生と助産師の経験を日本の助産教育に活かしたいと考え、北の大地に降り立ちました。天使大学大学院では、イギリスでの様々な文化や宗教、慣習や言語、社会問題の違いなどの経験から培ったグローバルな視点で、将来世界に羽ばたける助産師を育てていきたいと思っています。そして、イギリスと日本の医療制度や教育制度の違いから、助産教育について色々な角度から研究していきたいと考えています。

退任される教員からのメッセージ



“Time to Say Goodbye”

天使大学司祭

ケン・スレイマン神父



天使大学校章

天使大学の学生、院生、教職員、警備の方、清掃の方、カフェテリアの方、さよなら、さよなら、さよなら。25年前にこの大学の玄関に来ましたが、2025年の3月で旅立つことになりました。そのために、このメッセージを旅立ちの記念として、天使大学の校章・図について書きしるします。司祭として、この図の中のあまり話されない部分について説明します。この図は船です。皆さん、御存じのように、私たちの仕事場はマリアの宣教者フランシスコ修道会を通して1947年から創立されました。（シスターたち、ありがとうございました。）この船について学校の歴史の本と先輩たちに尋ねましたが、どうして船なのかはあまりよくわかりませんでした。私が考えたことは、この船は私たちの天使ファミリー（学生、院生、教職員、警備の方、清掃の方、カフェテリアの全ての関係者）が乗っている仕事場です。ちょうど大学ですね。おそらく、ノアの箱舟の物語に似ているように感じます。シスターたちの精神をとおして、医療ケアを必要している方々を運ぶシンボルです。1947年からこの召命をとおして出航しました。それから長い間素晴らしいシスターたち、医師たち、先生たち、学生たち、私たちが貢献しながら天使の船に乗り込み、そして船を降りていきました。私も25年間、この天使大学という船に乗船していました。その時代から残っている仲間の方々も10人ほど残っています。ちょっと寂しいですね。25年という長い期間を考えると、感謝の気持ちを伝えられなくなった方もいます。天国に旅立たれた仲間もいます。しかし、私もこの船を降りることになります。初めから残っている皆さん、感謝の気持ちを伝えたいと思います。25年前に初めて天使大学の船に乗ったケンちゃんは違う人だと思えます。身体はスマートで、日本語もあまり上手ではなく、日本の文化も今ほどわかっていませんでした。振り返ると恥ずかしい気持ちで溢れています。長い間、色々な面で失敗もしたことを許してください。私は1990年、新しい神父として日本に来ました。それは35年前です。ちょうど人生の半分です。その間に天使大学で25年働きましたので、人生の時間の25%過ごしました。私は外国人なので、日本に家族がいません。そのため天使大学は、仕事場としてだけでなく、第二の家になりました。そして皆さんは、私の第二のファミリーになりました。ですから、このさよならはとても寂しいです。このお別れ時、「愛をとおして真理へ」の助けをもらいます。なぜなら、愛は終わらないからです。3月いっぱい天使の船を降りますが、今までの皆さんとの過ごした時間は心の中に焼き付いています。

最後に、皆さんに励ます気持ちを贈り物として捧げたいと考えています。私たちの大学の目的は、ちょうど神様の御心と同じです。それは、人間が幸せな人生を過ごすことです。幸せな人生のためには、身体と心の健康が必要ですね。私たち天使大学の召命は、未来の日本と世界の人々のための専門職を育てることが目的です。そして天使大学の特長的な教育は「愛」ですね。日本ではアメリカよりもあまり「愛」という言葉を、生活の中で伝えることは少ないです。しかし、天使大学の学生たちの友人愛、教職員のチームワーク、ボイラーマンたちの雪かき、清掃の方々の掃除の気持ち、そしてカフェテリアのお姉さんたちの美味しいものを作る姿を見て、天使大学には愛を実践していると思います。どうぞ皆さん、ずっとお互いを愛しましょう。25年間一緒に働いてくださりありがとうございました。



20年前のケン神父



まっすぐに行く天使の神秘

天使大学学長 田畑 邦治

2020年4月、私は縁があって本学の学長として赴任しました。時ちょうどコロナ禍が猛威を振るい始めた頃でした。本誌『天使』編集担当者から赴任の挨拶のようなエッセイを求められ、私は「天使に招かれて－本学の源泉に汲む」を書かせていただきました（『天使』29号、2020年8月）。いろいろな迷いの中で、「天使大学」の「天使」という源泉に還り、創立者たちの教えに学ぶことが何よりの課題と思われたからでした。

5年が経ち、コロナ禍も一応の終息を迎え、2024年4月には、藤女子学園と天使学園の法人統合がなされ、新しい時代を迎えたところで、私は年齢や体調を考えて、学長を辞任し、二宮信一新学長にバトンを渡すことにしました。

私はこの機会にもう一度「天使大学」の創立の理念にさかのぼってみたいと思います。といっても抽象的なことではなく、創立母体の「マリアの宣教者フランシスコ修道会」のシスターがたのことです。極東の地、日本宣教に派遣されることとなったとき、彼女たちはまだ20歳台で、堅固な信仰を持っていたとはいえ、さすがに未開地への不安を禁じ得ないのです。

その時、会の創立者であるマリ・ド・ラ・パシオンが、指を天に指して「まっすぐに行きなさい」と、諭したと言われています。いま小生のもとに出典はありませんが、このエピソードは折あるごとに思い出されます。

そのとき、シスターがたの間に交わされたであろう微笑みの、かそけさと同じく、贈られた言葉もつつましいものですが、胸に迫るものがあります。

のちにキリスト教とは距離を置いていたユダヤ系フランス人哲学者のエマニュエル・レヴィナスは、「天使の玄義（神秘）」について珍しい見解を述べました。

「天使の玄義とは供犠（犠牲の捧げもの）の可能性です。存在というどんよりと鈍重なものの中に一つの意味が誕生するのです。「死ぬことができる」という一つの能力が誕生するのです。この能力は「自らを犠牲に供するためにはどうすればよいか」という知に結びついているのです。（エマニュエル・レヴィナス著、内田樹訳、国文社、1987年、122－123頁）」

難解な文章で恐縮ですが、先のマリ・ド・ラ・パシオンの、天国を指さした「まっすぐに行きなさい」の言葉と相通じる、峻厳で慰めに満ちた真理ではないかと思います。



リレーコラム
本学教職員による

笑って学ぶ英語の道 ～「スーパーサラダ」事件簿～

教養教育科 准教授 目時 光紀

アメリカで初めて外食したときの話です。カリフォルニアのステーキ屋で注文をほぼ終えたところ、ウェイトレスが“Super salad?”と聞いてきました。私は「アメリカ人はよく食べると聞けど、どれほど巨大なサラダが来るのか」と心配し、“How big is it? (どれくらい大きい?)”と質問しました。すると彼女は怪訝な顔で“What???”と一言。さらに聞き返しても同じ反応。ここで「日本人を舐めるな!」と内心意気込み、ゆっくり丁寧に“I said, how big is it? (どのくらい大きいのって言ったんだよ)”と言いました。

しかし返ってきたのは、“I said, soup or salad?”

(スープにしますか、サラダにしますかと言ったんだよ)”というセリフ。そう、“Super salad?”は音の連結でそう聞こえただけだったのです。恥ずかしい瞬間でしたが、今では良い思い出です。

「教科書英語はわかるけど、ネイティブの英語は難しい」と感じる人は多いですね。その原因の一端は、音の連結や脱落、同化にあります。解決策は地道ですが、とてもシンプル。英語字幕を頼りに、ネイティブの発音を何度も聞き込むことです。

英語学習の道は険しくとも、その先には海外の人たちとの楽しい出会いが待っています。さあ、耳を鍛え、未知の世界に皆さんも飛び込んでみませんか?

専門職への誓い

仲間とともに誓った、
看護職者になる決意

看護学科2年 西野 光莉

11月22日に看護職者になることを表明する、伝統のある戴帽式が開催されました。ナースキャップの授与、ナイチンゲールの意志を受け継いでいくことを示すキャンドルサービス、誓いの言葉などが行われました。昨年の戴帽式で見た先輩方は堂々としていて、自分もこのような姿になれるのだろうかと思いました。日々の学びが専門性を増していく中で、本当に自分が看護師になれるのか、今の思いでこの先もやっていけるのかと常に不安がありました。しかし、実習で患者さんと関わらせていただいたことで、改めて他者に貢献することの喜びを感じ、自己の成長を認識して、自信をもつことができました。そして、看護学の知識・技術の習得のために仲間とともに授業や実習に励んでいるうちに、あつという間に戴帽式を迎えました。戴帽式にあたり、内省を通して、これまで支えてくださった先生方や家族、なくてはならない存在であった仲間に感謝し、時に葛藤や不安を抱えながらも看護職者であることの自覚をもち、他者とのかかわりを大切にしながら、看護の道を歩んでいく決意を改めることができました。また、大学での経験を一層豊かなものにできるよう、精進していきたいと思いました。



管理栄養士を目指す強い意志

栄養学科2年 種市 愛莉



ステップアップセレモニーは2学年の後期に行われる行事であり、大学入学前には遠い未来のことだと思っていました。そんな行事を終え、時間の流れの早さを感じるとともに、管理栄養士になりたいという意志が強まりました。

式典の準備や練習は、授業以外の場面で仲間と話す貴重な時間でした。約1年半一緒にいる友達でも、まだまだ知らない良い一面があるのだと気付くことができました。自分には優しく素直な仲間が沢山いると思うと、非常に心強いです。また、ステップアップセレモニーは、多くの人の支えがあってこそ成功できた行事です。配布資料や体育館の床のシート、写真の撮影、音楽等は当たり前で用意されているものではありません。周りの人に感謝するということは、これらの物を準備してくださった方々がいるのだと気付くところから始まるのだと実感しました。

式典の中で「食べることは生きること」という言葉を聞いて、自分は誰かの生きを支えるための勉強をしているのだと分かりました。そして、目の前の学習ばかりに集中して忘れていた「食を通して誰かの人生を支えたい」という大切な思いを再確認することができました。多くの知識を得ることは自分の成長のためだけではなく、将来、実際に自分が食生活を支えることになった方のためでもあると思うと、より一層日々の学びを大事にしようという気持ちになります。

残りの2年間も、長いようで短い時間になると思います。この行事で感じた、人への感謝の気持ちと管理栄養士を目指すという強い決意を忘れずに、残りの学生生活を送っていきます。

あなたの声をお聞かせください

学報「天使」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりを目指しています。
ご意見、ご感想、取り上げてほしい話題等ございましたら、下記あて先までお寄せください。

あて先／〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30 天使大学広報委員会 tel.011-741-1051 fax.011-741-1077



天使大学

看護栄養学部／看護学科・栄養学科
大学院／看護栄養学研究科・助産研究科(専門職学位課程)
〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30
TEL.011-741-1051 FAX.011-741-1077

第38号 2025年3月1日 発行 天使大学広報委員会

<https://www.tenshi.ac.jp>

